

社会を変えるには、「おかしい」と思っている人に
声を上げていくことが必要です



作家
雨宮処凛さん

●聞き手 白井美樹 (ライター)

雨宮処凛さんは、思春期のいじめ体験や、家出、リストカット、自殺未遂などを、自叙伝の中で赤裸々につづってきた。その流れから、若者の「生きづらさ」にフォーカスを当てて取材してきたが、背景に現代社会の労働問題があると気づき、近年はプレカリアート（不安定な労働者）問題の執筆活動に力を入れている。現在もフリーターによるデモや集会などに参加しており、「行動する作家」として、常に社会的弱者の傍らにいて筆をふるう姿勢を崩さない。そんな雨宮さんに、社会に対して思うことや、生きづらさからの脱却法について伺ってみた。

— 雨宮さんは中学生のときに、ひどいいじめにあったそうですね。

雨宮 ある日突然、バレーボール部内でいじめが始まったのです。順繰りにいじめのターゲットは変わっていき、陰口をたたかれたり、冷たい視線を浴びせられたり、揚げ句の果てには殴る蹴るの暴力も起こりました。仲の良かったはずの友達も助けてくれず、いきなり豹変していじめる側にまわったのです。

— 学校の先生はいじめの実態を知らなかったのですか？

雨宮 知っていましたが、その学校には、「つらいことから逃げるな」「歯をくいしばって耐えろ」という校風がはびこっていたため、いじめに介入することはありませんでした。それはまさに、競争に負ける人、努力が足りない人、スキルが劣る人は排除してもいいという価値観であり、今から思えば、現代社会の縮図がそこにあったわけ

PROFILE ●あまみや・かりん●

1975年、北海道生まれ。愛国パンクバンドボーカルなどを経て、2000年、自伝的エッセイ『生き地獄天国』（太田出版）を出版し、デビュー。以来、若者の「生きづらさ」についての多数の著作を発表する一方、「プレカリアート」問題に取り組み、取材、執筆、運動中。メディアなどでも積極的に発言。「反貧困ネットワーク」副代表、「週刊金曜日」編集委員、「フリーター全般労働組合」組合員、「こわれ者の祭典」名誉会長、2007年、『生きさせろ！ 難民化する若者たち』（太田出版）がJCJ賞（日本ジャーナリスト会議賞）を受賞。最新刊に『14歳からの戦争のリアル』（河出書房新社）。

す。そんな価値観を真に受けてしまい、私はいじめられながらも、何の問題もない優等生を演じていました。勉強も頑張つて、過酷な受験をくぐりぬけ、高校に進学したのです。

—高校時代はどうだったのですか？

雨宮 中学時代の私は、傍目から見れば成績はいいし、親のいうこともよく聞く「いい子」でしたが、実は、心の内側はメチャクチャでした。押し殺してきた中学時代のつらかった感情が、高校生になって一気に噴出し、不登校になり、リストカットにも走るようになりました。自分の感情を殺してしまおうと、後になつてもつとひどいしつべ返しを食らうということを、このとき学習しましたね。

高校では友達をつくらないと決めていました。人間関係ができるから、はじめが起こると思っていたからです。

当時夢中になっていたのが、ビジュアル系バンドの追っかけです。家出をして、ライブハウスに入り浸る日々を送っていました。そこだけが、当時の私の唯一の居場所だったからです。

美大を目指していたときに、偶然、私が尊敬する球体関節人形作家と一緒に創作をしていた人に出会い、弟子入りすることができました。直に先生に習った方が近道なので、美大の進学はその時点でやめたのです。

—そのころは、バイトをしていたのですか。

雨宮 19歳のときに、人形作家見習いを始めたわけですが、定職を持っていたわけではなかったもので、いわゆるフリーターでした。ウエイトレス、お店の店員、スナック、キャバクラなどいろいろな仕事を転々としてました。

振り返ってみると、かなりきつい生活でした。昼のバイトは、時給が安いので家賃や光熱費、食費が払えないことが多く、夜の仕事は、時給はいいけれど、夜遅くまでお酒を飲んでいるので体がもたない……。かといって、



—高校を卒業後に、北海道から上京されたのですよね？

雨宮 ゆるい高校だったので、不登校が多くても、最後に帳尻が合えば卒業できました。もともと、人形作家になりたかったので、上京して予備校に通

そのころはバブル崩壊後の就職氷河期だったので、正社員になりたくても、私のような高卒のフリーターを雇ってくれるような会社などありません。生きづらさがひしひしと身にせまってきた、このままいけば自分は確実にホームレスになると思いました。

—バブル崩壊後は、確かに就職が困難をきわめた時代でしたよね。

雨宮 私たちは子どもの頃から、「頑張れば報われる」という大人たちの言葉を聞きながら育ちました。でも、バブルが崩壊して、「頑張っても報われない」社会に一変したのです。

私は高校時代、頑張るのをやめてきました。頑張るって有名大学に入った友人も、軒並み就職できないでいました。そんな状況の中で、だんだん病んできて、ついには電車で飛び込んだ友人もいました。

いながら美大を目指したのです。

人形作家といっても、作りたかったのはかわいい人形ではなくて、球体関節人形といって、グロテスクな人形でした。その人形を初めて見たときに、ビジュアル系バンドと同じように、自分の気持ちにスツとはまったのです。

経済の停滞により、未来へつながるハシゴが外された感じ。そのときは、こんなに鮮やかに時代にうそをつかれることがあるのだなと思いました。

—そのころ、阪神淡路大震災やオウム事件など、日本を揺るがす大事件もありましたよね。

雨宮 この二つの事件が起きたのは、私が生きづらさを感じていた20歳のときでした。

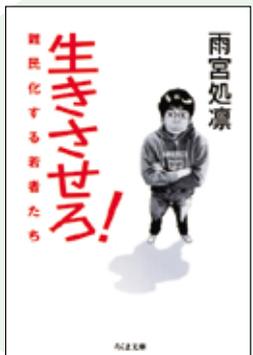
阪神淡路大震災では、戦後日本の繁栄が、一瞬にしてがれきの山になるのを目撃し、ものすごい衝撃を受けました。

オウム事件で感じたのは、物質主義・拝金主義一辺倒だった戦後日本の価値観や教育が間違っていて、これらを批判するために彼らは事件を起こしたのではないかということ。もちろん

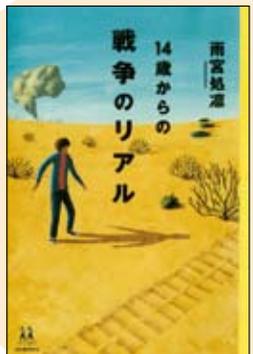
雨宮処凛さんの本
詳しくは公式ホームページへ
<http://www3.tokai.or.jp/amamiya/>



『生き地獄天国』雨宮処凛自伝
(ちくま文庫)



『生きさせろ!』難民化する若者たち
(ちくま文庫)



『14歳からの戦争のリアル』
(河出書房新社)

やったことは許されない犯罪行為ですが、共感できる場所もあり、「自分がこんな生きづらいのは、間違った価値観の中で生きてきたからではないか」と思うようになったのです。

実際、そのころの私は、フリーターから抜け出せる気配もなく、どうして生きたものと絶望する日々を送っていました。そのうち、こんなにつらいのは、自分のせいではなく社会のせいかもしれない、自分も思うようになり、社会とか政治とかの問題について、もつと考えたいという気持ちになっていったのです。

—それで人形作りではなく、右翼で活動するようになったのですか。

雨宮 実は、最初は右翼と左翼の違いもよく分からなかったのです。どちらの集会にも行きましたが、左翼はインテリが多く、言っていることが難しすぎてさっぱり分かりませんでした。

見て、オフアーしてきたようです。

セルフドキュメンタリーのような撮影法で、自分と半年間対峙する中で、「右翼に依存することで、自分の問題から逃げていただけだった」ということがますます分かってきました。そして、1999（平成11）年に、右翼から離脱したのです。

—作家になったきっかけは？

雨宮 映画が公開されると、結構大き

一方、右翼の方は、「戦後民主主義が悪い」「日本に物質主義と拝金主義を刷り込んだアメリカが悪い」ということばかりを強調していて、とても分かりやすく感じました。

私は、それまで「生きづらいのも、いじめられたことも、貧乏なものも、100%自分が悪い」と思っていたので、右翼の主張に出会ったときに、初めて免責された気分になり、その活動に傾倒していったのです。

—右翼に入って、どんな活動をしていましたか？

雨宮 政治の勉強をしたり、駅で街頭運動をしたりしていました。それから、右翼バンドもやっていましたね。「憲法改正」「東京裁判史観打倒」「日米安保」なんていう歌詞ばかり呼びまくるバンドです。

でも、右翼に入っていたのは、2年

な反響がありました。その影響で、ある出版社から自伝を書いてみないかというお話をいただいたのです。

もともと私は、過剰に自分を表現したいところがありました。いじめられ、否定され続けていると、自分のつらい思いや割り切れない感情を表に出さないと、抱えきれなくなってしまう。いざれ病んだり死んだりしてしまいうでした。それが、本を書くことで、表に出せるようになり、何とか精神の均衡を保てるようになりました。

弱だけでした。次第に「自分の生きづらさをごまかすために、右翼思想にはまっているだけ」と、分かってきたからです。

日本国憲法についてのデイベートをする機会があり、初めて憲法をきちんと読んで、感動したことも影響しました。憲法は、戦争の悲惨さを痛切なくらい伝えていて、世界を見据えたところで出来上がっていると感じ、「右翼の人たちは、何でこれに反対しているのだろう」と疑問に思うようになったのです。

—脱退するのはたいへんではありませんか？

雨宮 抜ける半年前に、大きな契機がありました。「新しい神様」というドキュメンタリー映画に主演することになったのです。この映画の監督は、私がイベントで、軍服姿で演説するのを

—その最初に書かれた自伝が、『生き地獄天国』というデビュー作だったのですか。

雨宮 はい、予想以上に反響を得ることができ、その後も立て続けに本を出版させてもらうことができました。物書きで生きていこうと思えるようになったのは、第2作目を書いているときくらいからです。

—これを続けていかないと、完璧にフリーターで一生を終えなくてはならな

くなる」と、退路を断たれた感はある
ましたが、ものを書くようになったこ
とで、少し「生きづらさ」から解放さ
れました。

—作家になった当初は、若者の「生き
づらさ」が主な執筆のテーマでしたね。
そこから、プレカリアート問題を追及
するようになった経緯は？

雨宮 最初は、生きづらさから脱出す
るにはどうしたらいいかなど、私なり
の解決策を書いていました。本を読ん
だ若者が、少しでも「生きよう」と思っ
てくれればいいなと……。

やがて、生きづらさの背景には、個
人の心の問題だけでなく、社会の問
題があるのではないかと思うようにな
り、いろいろ調べていくうちに、
2006（平成18）年に「プレカリアー
ト」という言葉を知ったのです。この
あたりから、社会問題に対して、かな

り正面切ってものを言うようになりま
した。

—プレカリアート問題について、簡単
に説明していただけますか。

雨宮 プレカリアートは、プレカリオ
（不安定な）とプロレタリアート（賃
金労働者）が合わさった言葉です。非
正規雇用で生計を立てている人や、何
らかの理由で職を得にくい人の総称
で、03（平成15）年にイタリアの路上
の落書きからこの言葉が使われ始めた
といわれています。当時から、イタリ
アやスペインなどでは、高学歴でも派
遣しか仕事がなく、月の給料が十数万
という労働環境の悪化が深刻化してい
ました。

日本でも、若年層の不安定化、低賃
金化がものすごい勢いで進んでおり、
今も悪化の一途をたどっています。プ
レカリアートの集会に出たり、取材を

進めたりするうちに、この問題の根深
さに直面し、本格的に取り組むようにな
りました。

—プレカリアート問題の現状は、どの
ようになっているのでしょうか。

雨宮 労働をめぐる環境が著しく過酷
化してきています。

企業の経営難から発し、使い捨てで
きる非正規雇用の労働者やフリーター
があふれています。こうしたワーキン
グプアの人は、生活が不安定なので、
1年先、2年先どころか、半年先、3
カ月先にどうなっているかも分かりま
せん。そうになると、結婚したり、子ど
もを作ったりなどの人生設計も難しく
なっています。

貧困に悩む若者は、年齢を重ねてい
くと、もっと仕事が見つかりづらくな
ります。するとホームレスになったり、
軽犯罪を繰り返して刑務所暮らしをし

たりという人も増えていくでしょう。
このように、貧困が全世代の問題にな
りつつあります。

—正規雇用でない限り、ますます生き
づらい社会になっているわけですね。

雨宮 正規雇用の労働環境だって悪
くなるばかりです。ものすごい長時間
労働を強いられ、過労死寸前の人があ
ふれ出しています。即戦力にならなけ
れば解雇といった価値観が会社組織に
はびこっているのです。その中で心を病
んでいき、自殺する人も増えています。
結局、平然と生きていけるのは、幹部
と幹部候補だけという組織の構図が出
来上がっているのです。

—改正派遣法も施行されましたが、

雨宮 この法律は、生涯派遣や不安定
雇用を固定化するだけのものだと思います。
ます。どんなに頑張っても報われない
人を、社会的に作ってしまうので、あ
ぶないものだと捉えています。

—そうした社会を変えるにはどうした
らいいと思いますか。

雨宮 デモなどに直接参加してもいい
ですが、個別に議員に話し掛けたり、
マスコミを利用して伝えたりするのも
大きな力になります。要は、「おかし
いと思う声」や「賛成してない声を挙
げること」が大切です。一番いけない
のは、「誰かが何とかしてくれる」と
思っ、声を上げないことです。

—雨宮さんは、行動的でパワフルな女
性だと思われていますが、本当のご自
分はどうなのでしょう？

雨宮 本当の自分は、もともと内向的
で引きこもって本を読んでいたりする
のが好きです。でも、このままだと
られっ子で人生を終わるのは嫌だと思
ったので、無理やり行動的な感じに
キャラ変をしました。とはいえ、やは
り内向的な自分も好きなので、両者が
同居しているのが、バランスがいい状
態だと思っています。



— そうですね、少し前まではロリータ服が、トレードマークでしたよね。

雨宮 ロリータファッションは20代半ばから30代半ばまで、10年以上やっていました。私にとっては、ある意味、鎧よろいのようなもので、武装をしていれば誰とも関わらず、心を開かなくてもいいので、安心していられたのです。

でも、あのデザインはさすがに飽きるので、最近はやっています。やつと長い反抗期が終わったような気がします（笑）。

— 作家になれたことを、ご自分で「奇跡のような偶然」と言っています、作家になっていなかったらどうなっていたと思いますか？

雨宮 もともと生きていること自体が奇跡のような人間なので、作家になっていなかったら、かなりの確率で自殺

をしていたか、もつと病んでいたと思います。確かに作家になったことで、生計を立てられるようになったのが、生存の大きなポイントになっていると思います。

— 今後はどんな作品を書きたいですか？

雨宮 いちばん書きたいのは、効率や合理性のみを追求する生き方・考え方が、「冷たい社会」「残酷な社会」を生んでいるということです。ちょっと不器用だったり要領が悪かったりするだけで、善良な人が生きられない社会になっているので、そういう人が普通

に生きられる社会になってほしいですね。

